

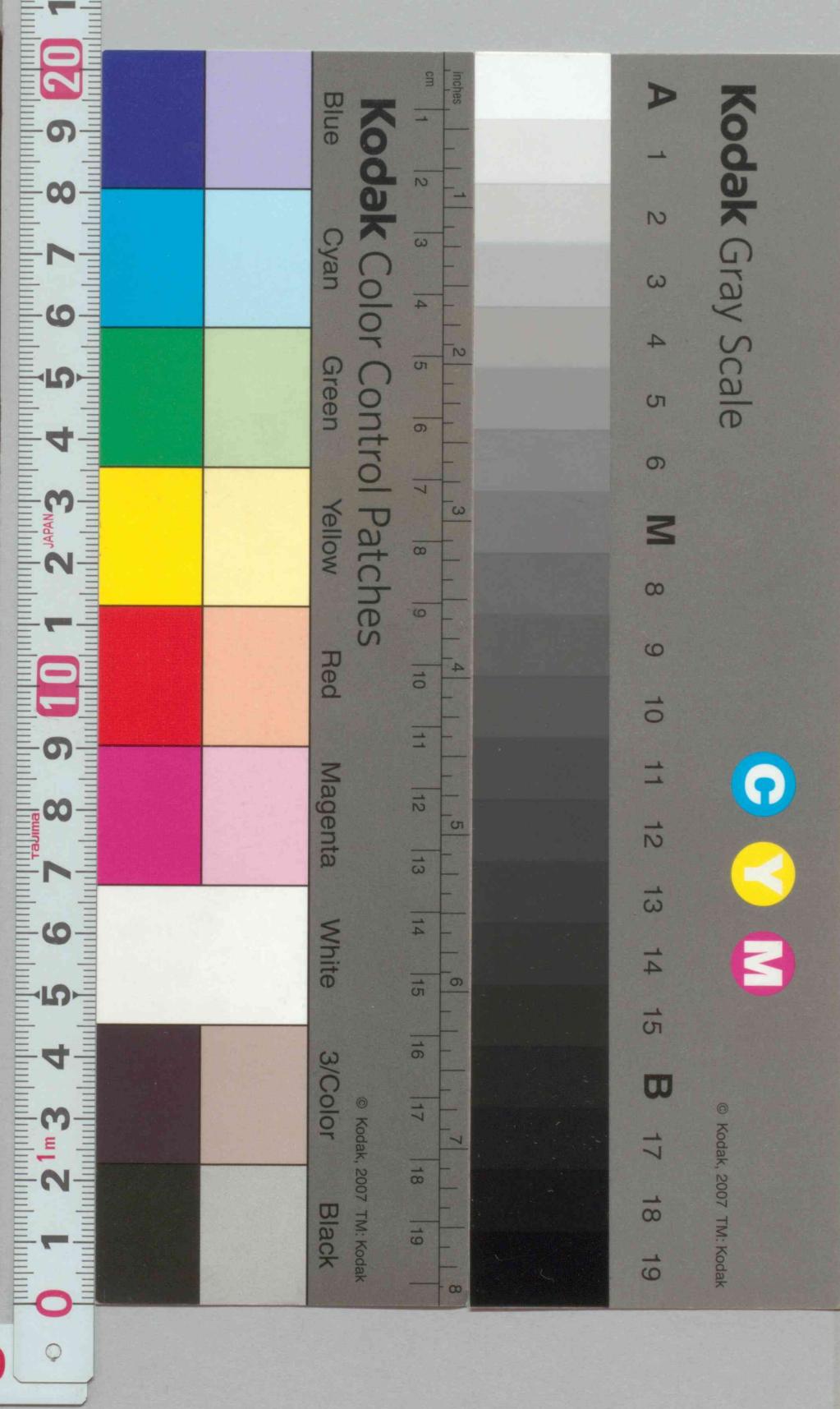
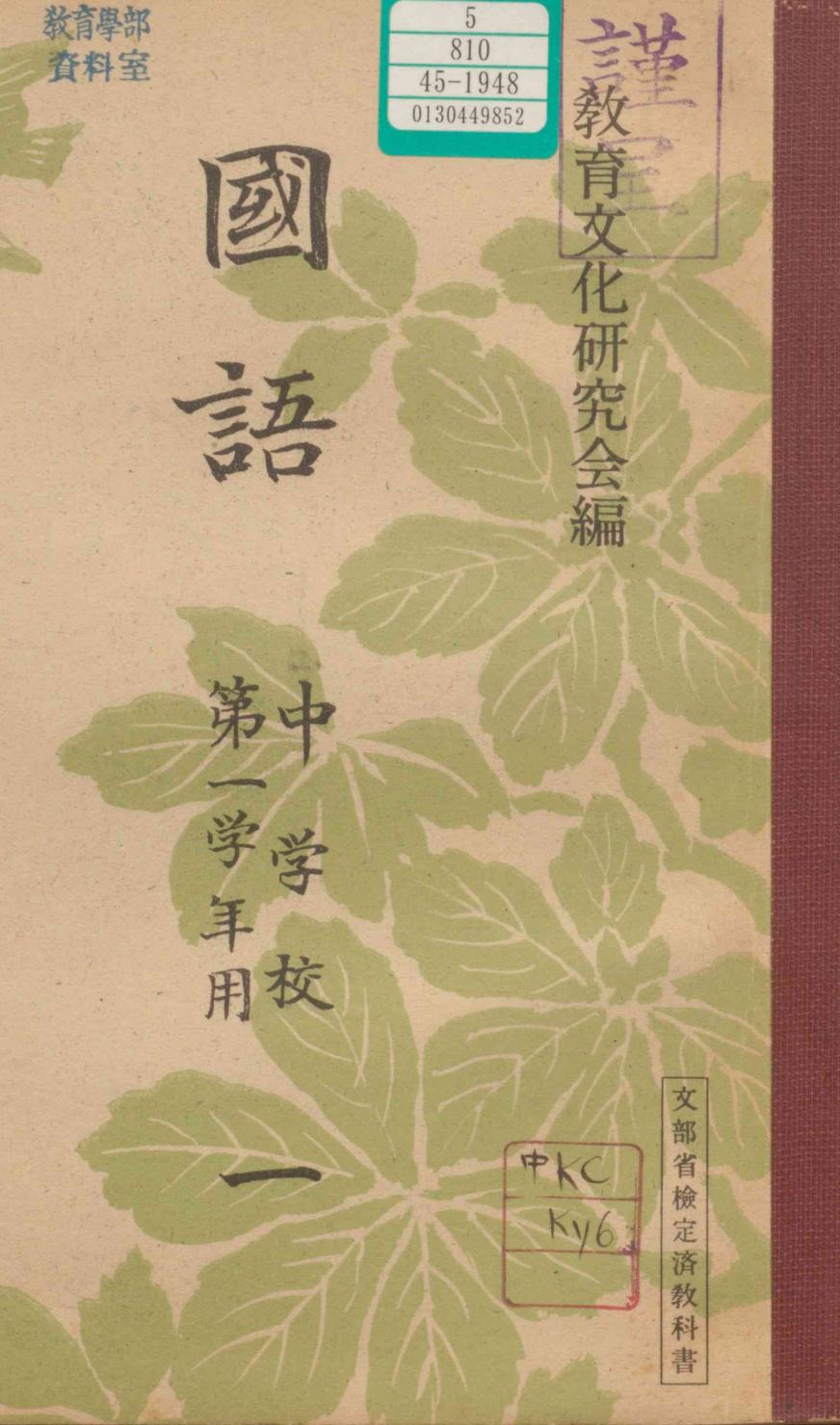
教育學部
資料室



教育図書株式会社

國語

中学校
第一学年用



Kodak Gray Scale

A 1 2 3 4 5 6 M 8 9 10 11 12 13 14 15 B 17 18 19

C

Y

M

© Kodak, 2007 TM: Kodak

50586

教科書文庫

5
810
45-1948
01304
49852

中央図書館

中学校「國語」

「國語」は教育目標達成のため、中学校から高等学校へと一貫性をもつた内容で指導上、学習上理想的なものであります。

本書の特色

- 新教育の理念と國語科の使命に鑑み、実際教育家の体験に基づいて編集しました。
- 國語学習の指導目標を全面的に達することができます。
- 文化の各領域に亘る廣い視野にたつて興味深い教材を集めました。
- 單元の組織に役だつような工夫がしてあります。
- 学習活動の発展に資するための解説を豊富に入れてあります。
- 教師用指導書「指導の研究」完備。本書御採用校に贈呈。

広島大学図書

0130449852



昭和二十三年八月二十三日
文部省検定済
中学校国語科

教科書文庫

5
810
45-1948
0130449852

國語

広島大学図書

0130449852



教育図書株式会社

中学校
第一学年用

一

廣島大學
教育學部圖書



目次

一 夜あけ	二 春の光	三 待つ心	四 犬ころ	五 雨にもまけず	六 あらし	七 山と海	八 ことば	九 書けていり	十 はつきりしたことば
二、ひとにぎりの土	二、シヤベルとつるはし	一、バ ン ダ イ ク ・ ラ ス キ ン ・ 三							
三、雨の田	三、雨の田	四、十一月三日	五、雨にもまけず	六、あらし	七、山と海	八、山の力	九、九十九里	十、九十九里	十一、山の力
四、十一月三日	五、雨にもまけず	六、あらし	七、山と海	八、山の力	九、九十九里	十、九十九里	十一、山の力	十二、書けていり	十三、はつきりしたことば
五、雨にもまけず	六、あらし	七、山と海	八、山の力	九、九十九里	十、九十九里	十一、山の力	十二、書けていり	十三、はつきりしたことば	十四、はつきりしたことば
六、あらし	七、山と海	八、山の力	九、九十九里	十、九十九里	十一、山の力	十二、書けていり	十三、はつきりしたことば	十四、はつきりしたことば	十五、はつきりしたことば
七、山と海	八、山の力	九、九十九里	十、九十九里	十一、山の力	十二、書けていり	十三、はつきりしたことば	十四、はつきりしたことば	十五、はつきりしたことば	十六、はつきりしたことば
八、山の力	九、九十九里	十、九十九里	十一、山の力	十二、書けていり	十三、はつきりしたことば	十四、はつきりしたことば	十五、はつきりしたことば	十六、はつきりしたことば	十七、はつきりしたことば
九、九十九里	十、九十九里	十一、山の力	十二、書けていり	十三、はつきりしたことば	十四、はつきりしたことば	十五、はつきりしたことば	十六、はつきりしたことば	十七、はつきりしたことば	十八、はつきりしたことば
十、九十九里	十一、山の力	十二、書けていり	十三、はつきりしたことば	十四、はつきりしたことば	十五、はつきりしたことば	十六、はつきりしたことば	十七、はつきりしたことば	十八、はつきりしたことば	十九、はつきりしたことば
十一、山の力	十二、書けていり	十三、はつきりしたことば	十四、はつきりしたことば	十五、はつきりしたことば	十六、はつきりしたことば	十七、はつきりしたことば	十八、はつきりしたことば	十九、はつきりしたことば	二十、はつきりしたことば

夜あけ

この課は「よびかけ」である。ことばの言い方に気をつけながら、みんなで演出をくふうしよう。

「夜があける。」「あたらしい光。」「力と生命に満ちてゐる光。」「朝はきた。」「かゞやかしい朝がきた。」「すがくしい大氣を胸いっぱいにすいこんで、
「私たちは立ちあがる。」



「一日の希望に胸あどらせて、」
「私たちのはめい／＼のしごとにいそしもう。」
「心あかるくいそしもう。」
「力強く」「正しく」

「おたがいに手に手をとつて、」

「いそしもう。」

「私たちちは小さい、」「しかし——」

「しかし私たちのつとめるところ、」

「村でも、」

「町でも、」

「浜べでも、」

「光が満ち、生命のあふれる、」

「よりよい一日がきずかれるように、」

「よりよい日々がいとなまれるように、」

「めい／＼のつとめにいそしもう。」

「はてなくつゞくわれらの道、」

「けわしい道、」

「時には、光のさゝない朝もある。」

「あらしにあける朝もある。」

「しかし——」

「大空をおゝう雲のかなたには、」

——（雲のかなたには、）

「光がいつもかゞやいていることを、」

「私たちちは知つてている。」

「みんなが知つてている。」

「私たちちのいそしむ小さなつとめ、」

「小さなつとめ、」

「私たちちの話す一つのことば、」

「一つ／＼のことば、」

「そのすべては世の中に結ばれている。」

「光を失わぬ、」

「あらしにまげず、」

「夜あけの心を常にいだいて、」

「夜あけの心を、のばしていこう。」

「私たちちは夜あけのこども、」

「手に手をとつて、」

「私たちちは夜あけのこども、」

「手に手をとつて、」

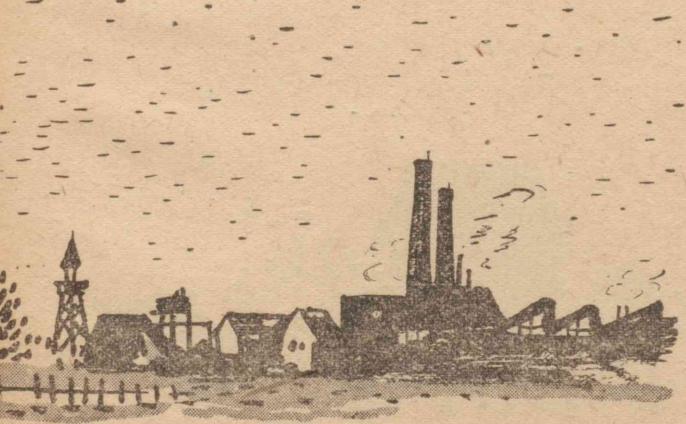
「私たちちは夜あけのこども、」

「手に手をとつて、」

「一夜 あけ



三



二

二 春 の 光

「よりよい一日をきずきあげよう。」

「正しく、強く、」「手に手をとつて。」

【学習の手引】

- (1) この「よびかけ」の組み立てについて考える。
- (2) この「よびかけ」の演出をみんなでくふうする。できばえについて話しあう。
- (3) 「入学」・「春」・「朝」などの題で、「よびかけ」を作つてみる。

二 春 の 光

山 村 蓦 鳥

山村暮鳥、本名は土田八九十。明治十七年（一八八四）群馬縣で生まれ、大正十三年（一九二四）になくなつた。詩人。著書には、「暮鳥詩集」がある。

春の川

春の川は、
ながれているのか、
いないのか、
ういている



四

わらくずのうごくので、
それと知られる。

春のいなかの
大きな川を見るよろこび、
そのよろこびを
ゆつたりと雲のように、
ほがらかに
飽かずながして、
それをまたよろこんでみている。

たつぶりと、
春は、
小さな川々まで、
あふれている、
あふれている。



五

なんといううらゝかな朝だろうよ。
娘たちのひとかたまりがみちばたで
たちばなししている、
うれしそうにわらつてている。
そこだけが
ばかりに明かるい。
だれもかれもそこを通るのが
まぶしそうに見える。

こども

あやゝこどもの声がする。
家のこどもの泣き声だよ。
ほんとに
あんまりのどかなので、
どこか遠い／＼
ちとぎばなしの國からでもつたわつてくるよう にきこえる。

(「現代日本文学全集」第三十七卷による)



【学習の手引】

- (1)それ／＼の詩の味がよく出るよう、朗読の仕方をくふうする。
- (2)それ／＼の詩の情景について話しあう。
- (3)外の詩をもつと読んでみる。
- (4)「春」に取材して詩を作り、発表しあう。

三 待 つ 心

バ ン ダ イ ク

この課は、ヘンリー・バンダイクの「ひとにぎりの土」と、ジョン・ラスキンの「シャベルとつるはし」との二つの文で組み立てられている。「待つ心」が、それ／＼どのように表われているかを考えてみよう。

一、ひとにぎりの土

ヘンリー・バンダイクはオランダ系のアメリカ人で、一八五二年に生まれ、一九三三年になくなつた。牧師として、作家として外交家として、それ／＼りっぱな働きをした外に、プリンストン大学で長く英文学を講義したこともある。作家としての彼は、すぐれた隨筆や詩をたくさん書いたが、ことにたとえ話を愛し、出世作「もうひとりの博士」も、キリストの誕生にちなんだ美しい寓話である。彼は、よく、何かお話を頭に浮かぶと、ノートに写しておいて、五人の子どもに読んで聞かせるのであった。この文も、そういうお話を一つであろう。

ある川の土手に、ひとにぎりの土がありました。それは、きたない、ねばくした、たゞの土くれでした。が、しかし、その土は、自分をたいへんりっぱなものだと思い、そのうちに自分のねうちが他の人たちにわかる時が来たら、世の中でえらい働きをしようなどというすばらしい夢を数々持っていました。

頭の上では、春の日を浴びながら、木々が喜びあっています。やさしい花が開き、若芽がのび、またルビーやエメラルドの粉がふわ／＼した雲になつて地上にかゝつたのではないかと思われるほど、明かるい澄んだ色が森じゅうに輝く、よい時が來たからです。

花は、この不意にやつて來た美しさで上氣して、頭をたらして、近くの花に寄りそいました。するとそのそばを風がなでて通り、そして言つました。

「娘さんたち、あなたがたは、なんてきれいになつたのでしょうか。おかげで、世の中が明かるくなります。」

川は、新しい力を感じて元氣づき、あちらから、こちらからと、水が流れ寄つていつしょになるのを喜んで、岸べにうたいたかけました。氷の足かせからはなたれ、雪の山をとつとと逃げて來たこと、またこれから大急ぎで行つてしまつなければならぬ大きな仕事、たくさんの工場の水車を回したり、海に大きな船を浮かべたりする大きな仕事をみんなうたつて聞かせたのです。

土は、しかし、土手の中に寝て、わき見もせずにじつと待ちながら、大きな理想で自分を慰めていました。

「いつか時期が來る。いつまでもいつまでも、こゝにこうして知られずに過ぎてしまはずはないのだ。光榮と美と名誉は、時が來れば私の手にはいるのだ。」

とう／＼ある日のこと、土は、長いことしんぼう強く待つたその場所から持ち上げられるのに氣づきました。鉄の薄い刃が、ぐさとその土の下にさゝり、土を持ち上げ、他の土くれといっしょに荷車の中にほおり込みました。それから、なんだか、ひどくでこぼこした、石のある道をゆられて行きました。けれども、土はこわがりもしなかつたし、失望もしませんでした。土は自分にこう言いました。「しかたがないのさ。輝かしいところへ行きつくには、いつも險しい道を通らなければならないのだ。さて、これで私もうじきえらい仕事にとりかゝれるというものだ。」

しかし、このつらい旅も、その後に続いた難儀、苦痛に比べたら、なんでもありませんでした。土はおけに入れられたと思うと混ぜられ、こねられ、かきまわされ、踏みつけられたのでした。このしうちはもうがまんができないほどでした。けれども、これほどの大騒ぎをするからには、あとで何か非常にいいことが起るのに違いないということが、せめてもの慰めでした。だから、今はがまんさえすれば、その後には、すばらしい、いい報いが待つていて、土は信じました。

それから、土は、ろくろにのせられ、くる／＼回されて、しまいには、これでは四方八方に飛び散つて、めちゃめちゃになるのではないかと思ったほどでした。そうして回つてゐるうちに、何かしらぬ力が、土を押しつけ、型をつけましたが、この目の回る苦しみの中に、土は自分が形を変えつゝあることを感じたのでした。

それから、だれのともわからぬ手が、土をかまに入れ、そのままに火を入れました。その火は、身を貫ぬくように激しく、土がこれまで川の土手で浴びたどの夏の日よりも熱いものでした。しかし、

こういうすべての苦しみを、土はすばらしい未來を信じてがまんしました。

「私のために、みんながこんなにほねをおるというのは、私がよほどりっぱなものになるからに違いない。たぶん、お寺のお飾りか、さもなければ、王様のテーブルの上に置く花瓶なのだろう。」

ついに火入れは終りました。土はから取り出されて、青空の下の涼しいところに、板を敷いて置かれました。苦しみは過ぎました。楽しみは目の前にあります。

土のせられた板のかたわらに水たまりがありました。深くはなく、水も澄んではいませんでしたが、しかし、さぞなみもたたず平らかでしたので、その上に落ちるもの影を、すべて公平に、ありのまゝうつし出していました。土は、板から持ち上げられた時、初めてその水の上に自分の新しい姿を見ました。あれほどの忍耐と苦痛の報いとして得たもの、今までの希望の実現——それはまっすぐで、ぎごちない、赤く見にくく、つまらない植木ばちなのでした。土はその時、悟りました。彼の運命は、王様の御殿へ行くのでも、藝術の宮殿を飾るのであります。なぜなら、その植木ばちは、輝かしいところも美しいところも、またなんの威嚴もなかつたからです。

土は、隠れた造り主に、小さい声でうらみを述べました。

「なぜ、私をこのようにお造りになつたのです。」

土は、不満をいだいて、すねた幾日かを過ごしました。すると、ある日、その植木ばちにどろがつめられ、それから、何かごそくした茶色の死んだようなものがその中に埋められ、またその上にどろがかけられました。この新しい恥ずかしめには、土も腹がたちました。

「ごみとくずをつめるなんて、これはひどい。今まで、まさか、これほどではなかつた。私はでき

そこなつたのに違いない。」

しかし、まもなく、はちは温泉へ入れられましたが、そこでは、暖かい日が、そのはちの上に当たり、水が注がれました。こうして幾日か土が待つうち、ある変化が起りはじめました。何かが、はちの中で、かすかに動いています。新しい希望のようなものです。けれども、土はまだ何も知りません。その希望がなんであるかも知りません。

ある日、土は、またその場所から持ち上げられて、大きな教会に連れて行かれました。やはり、夢はついにほんとうになろうとしているのです。この土には、世の中で勤めるべきりっぱな役割があつたのです。喜びに満ちた音楽が、まわりじゅうにながれました。周囲は美しい花で埋まっています。しかし、土にはまだわけがわかりません。そこで、すぐわきの、自分と同じようなはちに、小さな声で聞いてみました。

「その人々は、なぜ、私をこゝへ連れて來たのでしょうか。そして、なぜ、みんなが、私たちの方を見るのでしよう。」

もう一つのはちは答えました。

「あなた、ごぞんじないのですか。あなたは、ゆりの中でも王様といつていよいよ美しいゆりを持つていらつしゃる。そのゆりの花びらの白いことは雪のようで、しんはまるで純金のようです。みんながこちらを見るでしょう、それはあなたのゆりが世界でいちばんみごとだからです。その花の根をあなたはご自分のまん中に持つていらつしゃるのです。」

これを聞いて土は満足し、ひそかに造り主に感謝しました。なぜなら、土の器であつても、そのよ

うな宝を自分の中にいだくことができたのですから。

(「世界名作選」石井桃子の訳による)

二、シャベルとつるはし

ラスキン

ジョン・ラスキンは、一八一九年英國で生まれ、一九〇〇年になくなつた。有名な批評家で、著書には、「近代画家論」・「ベニスの石」・「胡麻と百合」・「自傳」などがある。

オーストラリア
南半球にあ
る大陸。英
民國の地。
自治植

「私は、あのオーストラリアの坑夫のように、仕事に対する意氣込みができるだらうか。シャベルとつるはしの用意はよいか。みじたくはどうだ。シャツのそでは、まくりあげたか。呼吸はどうだ。気分はどうだ。」

少したいくつかもしれませんが、この比喩を今少し続けてみましよう。諸君がさがし求めている金属といふものは、著者の心です。意味です。そして、著者のことばといふものは、諸君がその金属を持つるはし、それは、諸君の細心な注意と諸君の学問です。溶鉱炉、それはものを考えるあなたがた自身の心なのです。この道具とこの火なしで、諸君は、りっぱな著者の心を会得できるものと考えてはなりません。諸君は、時には、たつた一粒の金属を集めるために、とぎすましたのみで、実際に念入りにけずらなければならぬ時もありましょう。また、実際に根氣よく吹き分けなければならない時もあります。

だから、まず第一に、私は心から、そして権威をもつて、(そうです。この私の意見はまちがつていないと確信するからであります。)諸君に忠告しようと思ひます。「諸君は、じつとことばをにらんで、その意味をはつきり理解する習慣をつけなければなりません。」

(「世界名作選」中野好夫の訳による)

【學習の手引】

- (1)二つの文の読後感を話しあう。
- (2)「ひとにぎりの土」と「シャベルとつるはし」との二つの文には、「待つ心」がどのように表わされてゐるかを考えて、話しあう。
- (3)めい／＼の心の持ち方や心の準備についてふり返ってみる。
- (4)たとえば「机」というような題で文を作つてみる。

四 大 こ ろ

長谷川二葉亭

長谷川二葉亭、本名は辰之助、号を二葉亭四迷といつた。文久二年(一八六二)東京で生まれ、明治四十一年(一九〇九)になくなつた。小説家。著書には、「浮雲」・「平凡」などがある。

うれしいにつけ悲しいにつけて、思い出すのはボチのことだ。

忘れもせぬ、祖母のなくなつた翌々年の、春雨のしとくと降るうすら寒いある夜のことであつ

た。私は例の通り、よいのくちから寝てしまつたが、ふと、目をさますと、遠くでかすかに、キャンキャンというような声がする。不思議に思つて、耳をすましていると、次第に大きく高くなつて、ついには確かに門前に聞える。

疑いもなく、小犬の鳴き声だ。時々のどでも締められるようにけたゝましくキャンキャンと鳴きたてる。そのこわじりが、やがてかぼそく悲しげになつて、めいるように遠い／＼ところへ消えてゆく。と思えば、たちまちまた近くで耐えきれぬようになき出して、クン／＼と鼻をならすような時もあり、ギヤオとあくびをするような時もある。

私は元來動物好きで、わけても犬は大好きだから、近所の犬はたいていなじみだ。けれども、こんなかほそいかわいげな声で鳴くのは、一匹もないはずだから、不思議に思つて、そつと夜着の中から首を出すと、

「どうしたの。寝られないのかえ。」

と、母が寝返りをうつてこちらを向いた。私はこの返答はさしあいて、

「あれは白じやないねえ、おつかさん。もつと小さい犬の声だねえ、どうしたんだろう。」

「捨て犬さ。」

「捨て犬つて、なあに。」

「捨て犬つて、だれかが捨ててつたのさ。」

私はしばらく考えて、

「だれが捨てていつたんだろう。」

「あゝかたどこかの人さ。」

「どこかの人が犬を捨てていつたと、私は二、三度くり返してみたが、わからない。」

「どうして捨てていつたんだろう。」

「うるさいよ。」などと言う母ではない。どこまでも相手になつて、その意味を説明してくれて、「もうあそいから黙つておやすみ。」と、優しく言って、またあちらを向いてしまつた。

私もまた、夜着をかぶつた。犬は門前を去つたのか、鳴き声がやゝ遠くなる。寝られぬまゝに、私は夜着の中で、今聞いた母の説明をくり返しくり返し味わつてみた。まず、どこかの飼い犬が、縁の下で子を産んだとする。ちっぽけな、むく／＼したのが重なりあって、首をもたげて、ミイ／＼と乳房をさがしているところへ、親犬がよそから帰つて来て、そのそばへどさりと横になり、片っぱしからこゝえ込んで、べろ／＼なみると、小さい舌の先で、たあいもなく、ころ／＼ところがされる。ころがされでは大騒ぎして起き返り、またよち／＼とはい寄つて、ぽつちりと黒い鼻づらでおなかを探りまわりようやく思う柔らかな乳首を探り当てて、あわてて、ちゅうと吸い付いて、小さな両手でもみ立てもみ立て吸い出すと、甘いあたゝかな乳がどく／＼と出てきて、のどへ流れ込み、胸をくだつて、なんとも言えず甘い。と、わきの下から、まだ乳首にありつかぬ兄弟が、鼻づらで割り込んで来る。とられまいとして、うぶ毛のはえた腕を突つ張り、大騒ぎをやってみるが、とう／＼とられてしまい、またそこらを尋ねて、外の乳首に吸い付く。そのうちに、おなかがいっぱいになり、親のはだからだもあたゝまつて、溶けそうない心持になり、つい、うと／＼となつて、含んだ乳首が抜



けそうになる。夢ごこちにもあわてて、また吸い付いて、ひとしきり吸いたてるが、じきにまたあいなくうとくとなつて、乳首がついに口を抜ける。抜けても知らずに口を開いて、小さな舌を出したなりで、いつこう正体がない。

その時たちまち暗やみから、もじやもじやと毛のはえた、節くれだた大きな腕がぬつと出て、正体なく寝入っているところをむずとひつかみ、宙につるす。驚いて目をぱっちりあき、いたいけな声で悲鳴をあげながら、四足を突つ張つて、もがくうちに、頭から何かで包まれたようで、まづくらになる。窮屈で、息がつまりそうだから、出よろとするが、出られない。しばらくもがいているうちに、ふとあがきが自由になる。と、えりもとをつかまれて、高い／＼所から、どさりと落された。うろうろとしてそこらを見まわすけれど、なんだか変なさびしいまづくらな所で、だれもいない。ぼうぜんとしていると、雨に打たれて、見るまにねれしょぼたれ、おそろしく寒くなる。身ぶるいひとつして、くん／＼と親を呼んでみるが、どこからも出て來ない。どうにくれて、よち／＼とはい出し、雨の夜中をたゞひとり、あたゝかな親の乳房を慕つて悲しげに鳴きまわる声が、さつき一度門前へ来て、まだどこへかさまよつて行つたようだつたが、それがいつかまたもどつて來て、どこをどうもぐり込んだのか、今は鳴き声がまさしく玄関先に聞える。

「おつかさん、おつかさん。門の中へはいって來たようだよ。」

と私が、なんだかいたしまらないような氣になつて、また母に言いかけると、母は氣のなさそうな声で、

「そうだね。」

「出てみようか。」

「出てみないでもいいよ。寒いじゃないかね。」

「だつて、あんなに鳴いている。」

と、おりから消え入りそうな鳴き声に、私はわれしらずむつくり起き上がつたが、なんだかひとりではこわいような氣がして、

「よう、おつかさん、行つてみよう。よう。」

「ほんとうにしようがない子だねえ。」

と、口こゞとを言いく／＼母もしぶ／＼起きて、ぽんぽりをつけて立ち上がつたから、私もそのあとについて、玄関、といつてもつい次の間だが、玄関へ出た。

母がくつぬぎへ降りて、格子戸のかけがねをはずし、がらりと戸戸を繰ると、さつと夜風が吹き込んで、ぽんぽりの火がちら／＼となびく。その時、小さなまりのようなものが、つと軒下を飛びのいたようだつたが、やがて、ぽんぽりの火先が立ち直つて、一道の光がさつと戸外のくらやみを破り、雨水のところどころにたまつた地面を一筋細長く照らし出した所を見ると、ついそこに、生後まだ一箇月もたたぬ、むく／＼とふとつた、赤ちゃけた犬ころが、小指ほどのしっぽをちぎれそうにふり立てて、こっちを見上げている。なりは私が寝ていて想像したよりも大きかつたが、果たして、全身雨にぬれしょぼたれて、どうだらけになり、だらりとたれた、割合に大きい耳から、しづくをしたたらせ、ぽつちりと二つの目を青貝のように並べて光らせている。

「おや／＼、まあ、かわいらしい。」と、母もつい言つてしまつた。

いわんや私は犬好きだ。じつとして見てられない。母のそでの下から首を出して、ちよつちよつと呼んでみた。さほど恐れたようすもなく、ちょこちょことそばへ来て、さすがに少し平べったくながら、頭をなでてやる私の手を、下からぐい／＼押し上げるようにして、べろ／＼となめまわし、手をくれるつもりなのか、しきりにまるい前足を上げて、ばた／＼やつていたが、はてはやんわりと、痛まぬほどに小指をかむ。

私はかわいくてたまらない。母の顔を見上げながら、少し鼻声を出して、

「おつかさん、何かやつて。」

「やるのもいいけど、いついてしまうと、しかたがないからねえ。」と、口ではこばむようなことを言ひながら、それでも台所へ行つて、欠け茶わんにひや飯を盛つて何かのしるをかけてきてくれた。さつそくくつぬぎへ引き入れて、これをあてがうと、小犬はちょっと香をかいで、すぐうまそうに、まずびちゃびちゃとなめだしたが、しるが鼻へはいるとみえて、時々、くしんくしんと小さなくさめをする。たちまち、しるをなめつくして、こんどは飯にかゝつた。外に争う兄弟もないのに、しきりにこどとを言いながら、がつ／＼と食べ出しだが、飯はまだ食べ慣れぬかして、とかく上あごにひつづく。首を振つてみるとそんなことではなか／＼取れない。はては前足で口の端をひつかくよなまねをして大もがきにもがく。

このひまに、私は母と談判を始めて、「今晚ひと晩泊めてやつて。」と、ぼんぼりを持った手にぶらさがる。母はちょっとしぶつたが、もうこうなつてはしかたがない。「おとつあんにしかられるけれど。」と言いながら、けつときょくさんだらぼうしをさがして來て、くつぬぎのすみに敷いてやつた。

それはよかつたが、その晩ひと晩鳴き通されて、私はちつとも知らなかつたが、おかげで母は父にこごとを言われたそうな。

犬ぎらいの父は、泊めたその夜を鳴き明かされると、うんざりしてしまつて、翌日はぜひ追い出すと言ひ出したから、私は小犬を抱いて逃げまわつて、どうしても放さなかつた。父は困つた顔をしていたが、しかしそれも一時のことで、そのうちに小犬もひとり寝に慣れて、夜も鳴かなくなると、追い出すはずのものに、いつしかボチという名までついて、姿が見えぬと、父までいつしょにさがすようになつてしまつた。

(「二葉亭全集」による)

【学習の手引】

- (1) この文の読後感を話しあう。
- (2) 犬ころにボチという名のつくまでのできごとを整理して箇條書にしてみる。
- (3) 犬ころに対する母と父との氣持について話しあう。
- (4) 犬や外の動物について、めい／＼の味わつた事がらを話してみる。
- (5) 犬や外の動物について、たとえば「小ねこ」というような題で、文を作つてみる。

五 雨にもまけず

この課は、宮沢賢治の詩「雨にもまけず」と、谷川徹三の「十一月三日」と、北原白秋の「雨の田」の三つの文によつて組み立てられてゐる。この三つの文を味わつて、それ／＼の関係をよく考えよう。

一、雨にもまけず

宮 沢 賢 治

宮沢賢治は、明治二十九年（一八九六）岩手縣で生まれ、昭和八年（一九三三）になくなつた。短歌を作り、童話を書き、創作をし、脚本を書いた。農民の指導には最後まで身をもつて当たつた。宗教家でもあつた。作品には「どんぐりと山猫」・「月夜のでんしん柱」・「冬と銀河ステーション」などたくさんある。

雨にもまけず、

風にもまけず、

雪にも夏の暑さにもまけぬ

じょうぶなからだをもち、

欲はなく、

けつして怒らず、

いつもしづかに笑つてゐる。

一日に玄米四合と、

みそと少しの野菜をたべ、

あらゆることを、

じぶんをかんじょうに入れずに、

よくみききしわかり、
そしてわすれず、

野原のまつの林の陰の、

小さなかやぶきの小屋にて、

東に病氣のこどもあれば、

行つて看病してやり、

西につかれた母あれば、

行つてその稻のたばを負い、

南に死にそうな人あれば、

行つてこわがらなくともいいと言ひ、

北にけんかやそしょうがあれば、

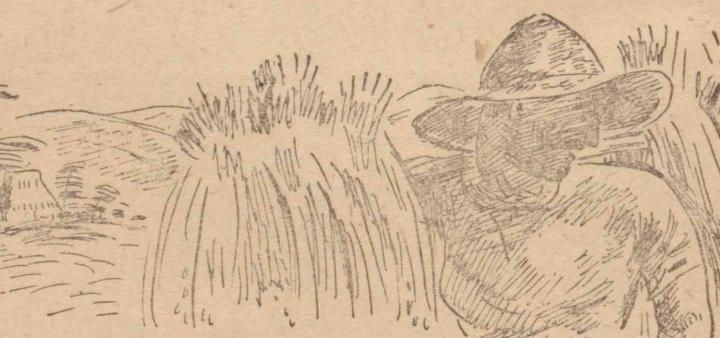
つまらないから

やめろと言ひ、

ひでりのときは

なみだを流し、

みんなに



でくのぼうとよばれ、
ほめられもせず、
くにもされず、

そういうものに、
わたしは、
なりたい。

(「宮沢賢治全集」による)

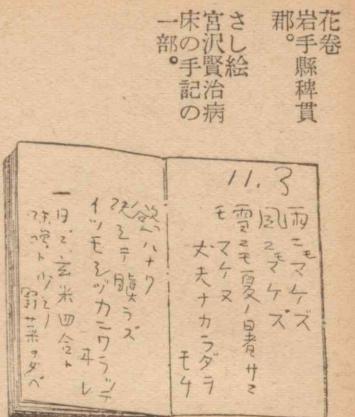
二、十一月三日

谷川徹三

谷川徹三は、明治二十八年（一八九五）愛知縣で生まれた。哲学者。評論家。著書には、「感傷と反省」・「生活・哲学・藝術」・「文学の周囲」などがある。

この詩を私は、明治以後の日本人の作ったあらゆる詩の中で最高の詩であると思っています。もっと美しい詩、あるいはもっと深い詩というものはあるかもしれません。しかし、その精神の高さにおいて、これに比べうる詩を私は知らないのであります。

昭和八年のことです。宮沢賢治はその時三十八歳であります。その前々年、すなわち昭和六年九月に、宮沢賢治は、その時、自分の從事していたある仕事の用を兼ねて、東京に出て参りました。その以前から、少しく胸を悪くしていたのでありますけれど、家人のあやぶむのをおして出てきました。ところが、すぐその翌日から発熱して、駿河台の下宿の一室に、ついに病臥する身となつた



花巻
郡岩手縣稗貫
さし絵
宮沢賢治の病
床の手記
一部

駿河台
東京都千代田区

のであります。それから一週間ばかりして、病のからだをそのまま、故郷の花巻に帰ったのであります。それから死ぬまで、ずっとほとんど病床で暮らしました。この「雨にもまけず」の詩は、その昭和六年発熱病臥してまもなく、十一月三日に、病床で、手帳に書かれたものであります。おそらく、あお向きに寝たまゝで書かれたものであります。十一月三日という、なつかしいかつての天長節の日に、賢治がこの詩を書いたということに、私は大きな意味を認めたいのであります。というのは、これを私は簡単に詩とよびましたが、それは詩の形をしているからそう申したので、賢治自身のこれを書いた氣持は、詩を書くというような氣持ではなく、もっとじかに、自分の心の奥の奥のもっとも深い願いを、自分自身に言いきかせるというような氣持ではなかつたかと思います。とにかく、こゝには、人に見せるという氣持は少しもありません。これは、全く自分のためだけに書いたものです。その意味では、願いであるとともに祈りであります。その祈りの心の純粹さが、われ／＼をうつのであります。詩にはもと／＼そういうものがあります。しかし、それを、かくまで純粹な表現にまで押し出したその心の昂揚に、この十一月三日という日にからまる感情が作用していることを、私は感じます。これは、明治のもつともはえある時代に、少年時を過ごした者だけが、感じうることかもしれません。

数年前ですが、北海道に参りました帰り、かねて念願の花巻に寄つて、私は、この雨にもまけずの詩の後半を刻した、その詩碑の前に、心からひざまずきました。

さし絵
宮沢賢治の
詩碑拓本。
（高村光太郎筆）

北上川
岩手縣
北部から流
れ、台湾に注
ぐ。

その日のことを、私は今もつて忘れることがで
きません。日記を繰ってみましたら、昭和十五年
の十月十二日でした。碑の前の石の花立には、
穂の出たすゝきや、赤い実のついたうめもどき
や、しおんがさしてあり、たけに白紙でこしらえ
たぬさが立っていました。九月二十二日には、毎
年碑前で催しがあるので、その時のなごりででも
あつたのでしょうか。碑の左手には五、六本の赤まつがあつて、陰をつくり、そのわずかに開かれた地
域の周囲も、十数本のくりの木の向こうは、まつの林でありました。東南の一方がやゝ透けて、北上
川がまつの間に水面をちら／＼光らせていました。日記には「ひとり碑の前に立つて涙とゞめあえ
す」と書いてあります。

私は賢治を知つて既に十年になりますが、賢治の生前にはついに知ることができず、これを非常に
残念に思つてゐる所以であります。しかし、死後すぐその作品に接し、それ以来、この人に對する感情
は、年とともにいよいよ高まるのを覚えます。私は、この人が、今日人々の思つてゐるより、はるか
に偉大な人であることを信じていますが、その私の思つてゐるより、實際はもっと偉大な人ではない
かと思うのであります。透谷とか、一葉とか、啄木とか、死後その名のます／＼もてはやされている
存在があります。しかし、それらのなんびともまして、賢治の名は、歲月のたつとともにます／＼
大きくなる名ではないか、そう私は思つています。

（二八七—一八八）
啄木 本名は石川 一歌人。
（二八九—一九〇）
一葉 本名樋口夏子。小説家。
（二九一—一九二）
透谷 本門太郎。詩人。
（二九三—一九四）
北上川
北上川
岩手縣
北上川
仙台
台湾に注
ぐ。

人間の偉さということが、その社会的地位にもなければ、そのいわゆる事業にもないといふこと
は、一應だれでもわかっているように考えていいながら、實際の世間では、評價の基準は依然としてそ
こにあります。ほんとうにわかるということは、それほどむずかしいことなのであります。私自身、
今、わかっていると思つてることを、もつと年をとつたら、あの時分には、ほんとうにはわかつて
いなかつたのだ、と思うようになるかもしれません。こういう思いは、私ども古典に接するたびごと
に、いつも感ずるのであります。論語とか、老子とか、万葉とか、芭蕉とか、こういう永遠の書物に
ついては、昔はわかつたと思っていたことが、五年、十年の歲月を経て読み返してみると、あの時は
ほんとうにはわかつていなかつた。やつと今わかつた。」といふ箇所に、いたるところで出会います。
ところが、更に五年なり十年なりたつて読み返してみると、同じ思いをまたくり返すのであります。
て、永遠の書物というものは、自然のように、それに接するたびごとに、何かそこに今まで氣づかなか
つた新しいものを、氣づかせるのであります。これが、古典の眞に古典たるゆえんであると、私は
信じております。そういう古典として、明治以後の文学のどれだけが残るかを、私は疑うものであります
が、賢治の作品が、そういう古典として残るということは、私は、今日ではいさゝかも疑つてしま
りません。

【註】(1)明治天皇の生まれた日。

(2)宮沢賢治のこの詩は、手帳の中に鉛筆でかたかなで書かれていたものである。詩碑は詩人高村光太郎
の筆によつて刻まれてある。

五 雨にもまげず



(3) 孔子がなくなつてから後、門弟たちが、孔子の行いやことばなどについて編集した本である。孔子は紀元前五五年に、今の中華民國の山東省に生まれ、仁を理想として、諸國をめぐって説いたが用いられないでの、著述に從事した。門弟は三千人もあつた。紀元前四七九年になくなつた。

(4) 老子といふ人の著書である。老子は老聃とも言い、孔子と同じ時代の哲学者であつた。

(5) 万葉集（「まんようしゅう」または「まんにょうしゅう」）のことで、わが國で最も古い歌集である。

仁徳天皇の元年（三一三）から淳仁天皇の天平宝字三年（七五九）まで、およそ四百四十六年間の歌四千四百九十六首をおさめてある。二十卷で、選者はいろ／＼にいわれている。

(6) こゝでは、松尾芭蕉の作品をさしている。芭蕉は江戸時代の俳人である。幼い時の名は金作・半七郎・

甚七郎などといつた。伊賀の拓植の人。正風といふことをとなえて、すぐれた作品をたくさん残した。

正保元年（一六四五）に生まれ、元禄七年（一六九五）に旅先でなくなつた。

三、雨の田

北原白秋
北原白秋

北原白秋、本名は隆吉。りゆうき明治十八年（一八八五）福岡縣で生まれ、昭和十七年（一九四二）になくなつた。

詩人。著書には、「邪宗門」・「桐の花」・「雀の卵」・「白秋民謡集」・「洗心雑話」などがある。

みの着て、かさ着て、犁の柄押して。
しつ、しつ、しつ。

お馬はひもじうてせりの葉たべる。
しつ、しつ、しつ。

雨ふりや、かわづがげこくわめく。
しつ、しつ、しつ。

雨やみ小やみにや、つんつんつばめ。
しつ、しつ、しつ。

どろ田のお馬よ、あつちこつちむくな。
しつ、しつ、しつ。

それでも隣は菜の花、げんげ。
しつ、しつ、しつ。

みの着て、かさ着て、雨ふる中を。
しつ、しつ、しつ。

（「白秋全集」による）



【学習の手引】

- (1) 「雨にもまけず」の詩の朗読の仕方をくふうする。
- (2) 「そういうものにわたしはなりたい」の「そういうもの」は何をさしているかを考えてみる。
- (3) 「十一月三日」を読んでから、前の詩を読み返してみる。
- (4) 「わたしはなりたい」という題で、めい／詩や文を作つてみる。
- (5) 「雨の田」の詩では、「雨にもまけず」の心はどのように表われているかを考えてみる。

六 あ ら し

島 崎 藤 村

島崎藤村は、明治五年（一八七二）長野縣で生まれ、昭和十八年（一九四三）になくなつた。詩人。小説家。著書には、「藤村詩集」・「千曲川のスケッチ」・「嵐」・「夜あけ前」などたくさんある。

一

子どもらは古いとけいのかへつた茶の間に集まつて、そこにある柱のそばへ各自の背たけを比べにいった。次郎の背の高くなつたにも驚く。家じゅうで、いちばん高い。あの子の頭はもう一寸四分ぐらいでかもいにまでとどきそうにみえる。毎年の暮れに、郷里の方から年取りに上京して、その時だけ私たちといっしょになる太郎よりも、次郎の方がずっと高くなつた。

茶の間の柱のそばは狭い廊下づたいに、玄関や台所への通い口になつていて、そこへ身長を計りに行くものはひとりずつその柱を背にして立たせられた。「そんなに背伸びしてはざるい。」と言い出す者があり、「もっと頭を平らにして。」などと言う者があつて、家じゅうの者がみんなで大騒ぎしながら何分伸びたというしるしを鉛筆で柱の上につけておいた。だれのたわむれから始まつたともなく、もう幾つともなく細い線が引かれて、その一つ／＼にはかしら文字だけをローマ字で表わしておこうな、そんないたずらもしてある。

「だれだい、この線は。」

と聞いてみると、末子のがり、下女のお徳のがある。いつぞや遠く満州の果てから家をあげて帰國したしんせきの女の子の背たけでもそこに残つてゐる。私の娘も大きくなつた。末子の背は太郎と二寸ほどしか違わない。その末子がもはや九文のたびをはいた。

四人ある私の子どもの中で身長の発育にかけては三郎さぶろうがいちばん遅れた。ひところの三郎は妹の末子よりも低かつた。日ごろ、次郎びいきの下女は、何かにつけて「次郎ちゃん、次郎ちゃん。」で、そんな背の低いことで三郎をからかうと、そのたびに三郎はくやしがつて、

「悲觀しちまうなあ。背はもうあきらめた。」

とよく嘆息した。その三郎がめき／＼と伸びてきた時は、いつのまにか妹を追い越してしまつたばかりでなく、兄の太郎よりも高くなつた。三郎はうれしさのあまり、手を振つて茶の間の柱のそばを歩きまわつたくらいだ。そういう私が同じ場所に行つて立つてみると、ほとんど太郎と同じほどの高さだ。私は春先のたけのこのような勢いでずん／＼成長してきた次郎や、三郎や、それから末子をよく見て、時にはこれが自分の子どもかと心に驚くことさえもある。

「子どもでも大きくなつたら。」

長いこと待ちに待つたその日が、ようやく私のところへやつて來るようになった。しかしその日が來るころには、私はもう動けないような人になつてしまふかと思うほど、そんなに長くすわり続けた自分を子どもらのそばに見いだした。

「強いあらしが來たものだ。」

と私は考えた。

「どうさん、家はありそうで、なか／＼ないよ。ぼくと三ちゃんで毎日のように歩いてみた。ふたりですっかりさがしてみた。この麻布から青山辺へかけて、もうぼくらの歩かないところはない。」

と次郎が言うころは、私たちの借家さがしもひと休みの時だつた。なるべく末子の学校へ遠くない所に、そんな注文があつた上に、よさそうな貸家も容易に見当たらなかつたのである。あれからまた一軒あるにはあつて、借り手のつかないうちにと大急ぎで、見に行つて來た家は、既に約束ができるていた。今のすまいの南隣に、三年ばかりも住んだ家族が、私たちよりも先に郊外の方へ引っ越して行つてしまつてからは、いつそう周囲もひつそりして、私たちの庭へ來る春もおそかつた。

めずらしく心持のよい日が私には続くようになつた。私は庭に向いたへやの障子を開けて、とかく氣になる自分のつめを切つていた。そこへ次郎が來て、

「とうさんはどこへも出かけないんだねえ。」

と、さも心配するように、それを顔に表わして言つた。

「どうしてとうさんのつめはこう伸びているんだろう。こないだ切つたばかりなのに、もうこんなに伸びちゃつた。」

と私は次郎に言つて見せた。貝づめというやつで、切つても切つても伸びてしかたがない。こんなことはずっと以前には氣づかなかつたことだ。

「とうさんも弱くなつたなあ。」

と言わぬばかりに次郎はやゝしばらくそこにしゃがんで、私のすることを見ていた。ちょうど三郎も作画に疲れたような顔をして、油絵の筆でも洗いに二階のはしご段を降りて來た。

「ごらん。おまえたちがみんなでかじるもんだから、とうさんのすねはこんなに細くなつちゃつた。」

私はふたりの子どもの前へ自分の足を投げ出して見せた。病氣以來肉も落ちやせ、ずっと以前には、信州の山の上から上州下仁田まで、日に二十里の道を歩いたこともあるすねとは自分ながら思われなかつた。

「すねかじりときたよ。」

次郎は弟の方を見て笑つた。

「太郎さんを入れると、四人もいてかじるんだから、たまらないや。」

と三郎も半分他人のことのように言つて笑つた。そこへ茶の間のからかみのあいた所から、ちょいとえがおを見せたのは末子だ。すねかじりは、こゝにもひとりいるというかのようだ。

その時まで、三郎は何かもじくして、言いたいことも言わずにいるといふうだつたが、

「とうさん、ホワイトを一本と、テラーローザを一本買つてくれない。絵の具が足りなくなつた。」

群馬縣北甘
上州
群馬縣。
下仁田
築郡。
信州
長野縣。

テラーローザ
茶色。

こうきり出した。

「こないだ買ったばかりじゃないか。」

「だって、足りないものは足りないんだもの。絵の具がなけりや、何もかけやしない。」

と三郎は不平顔である。すると、次郎はさつそく弟のことばをつかまえて、

「あ、またかじるよ。」

この次郎のじょうだんが、みんなをふき出させた。

私は子どもらに出して見せた足をしまって、なにげなく自分のてのひらをながめた。いつでも自分のてのひらを見ていると、自分の顔を見るような氣のするのが自分の癖だ。いま／＼しいことばかりが胸に浮かんできた。私はこの四疊半の天井からたくさんなうじの落ちたことを思い出した。それが私の机のそばにも落ち、畳の上にも落ち、掃いても、掃いても落ちて來たことを思い出した。何が腐りたぐれたかとうす氣味わるくなつて、二階のへやから床板を引きはがしてみると、ねずみの死がいが二つまでそこから出て來て、その一つは小さな動物のがい骨でも見るよう白く曝れていたことを思い出した。私は恐ろしくなつた。何かこう自分のことを形に表わして見せつけるようなものが、しかもそれまで知らずにいた自分のすぐ頭の上にあつたことを思い出した。

その時になつてみると、過ぐる七年を私はあらしの中にすわり読けてきたような氣もする。私のからだにあるもので、何一つその痕跡をとゞめないものはない。髪はめつきり白くなり、すわりだこは豆のようになかく、腰は腐つてしまいそうに重かつた。朝寝のまくらもとにたばこ盆を引き寄せて、寝そべりながら一ぶくやるような癖もついた。私の姉がそれをやつた時分に、私はまだ若くて、年取

つた人たちの世界というものをのぞいて見たように思つたことを覚えているが、ちょうど今の私が、それと同じ姿勢で。

私はもう一度、自分の手を裏返しにして、鏡でも見るようになく／＼と見た。

「自分のてのひらはまだあかい。」

とひとり思い直した。

三

銀座
東京区
都中央

茶の間には古い柱どけいの外に、次郎が銀座まで行つて買つて來た新しいのも壁の上に掛けてあつた。太郎への約束の柱どけいだ。こんど次郎がさげて行こうとするものだ。それが古いとけいと並んでいっしょに動きはじめていた。

「すごいとけいだ。」

と見に来て言うものがある。そろ／＼夕飯のしたくができるころには、私たちは茶の間に集まつて新しいとけいの形をいろいろに言ってみたり、それを古い方に比べたりした。私の四人の子どもがまだ生まれない前からあるのも、その古い方のとけいだ。

やがて私たちはいっしょに食卓についた。次郎は三郎と向かいあい、私は末子と向かいあつた。「送別会」とは名ばかりのような粗末な食事でも、こうして三人のきょうだいの顔がそろうのはまたいつのことかと思わせた。

「いよ／＼あすは次郎ちゃんも出かけるかね。」と私は古い柱どけいを見ながら言つた。「かあさんがなくなつてから、ことしでもう十七年にもなるよ。あのかあさんが生きていて、おまえたちの話すこ

とばを聞いたら驚くだろうなあ。わざと乱暴なことばを使う。『とけいを買いやがつた、動いていやがらあ。』おまえたちはその調子だもの。』

「いけねえ、いけねえ。』と次郎は頭をかきながら食った。

「とうさんがそんなことを言つたって、みんながそうちからしかたがない。』と三郎も笑いながら食つた。

「そういえば次郎ちゃんも一年に二度ぐらいずつは東京へ出てゐいでよ。何もいなかに引っ込みきりと考えなくてもいいよ。二、三年は旅だと思ってごらんな。とうさんなども旅をするたびに自分の道が開けてきた。いなかへ行くと、友だちは少なかろうなあ、ことに絵の方の友だちが。これだけがとうさんの氣がかりだ。』

こう私が言うと、今まで子どもの友だちのようにして暮らしてきたお徳も長い奉公を思い出し顔に、「次郎ちゃんが行つてしまふと、急にさびしくなりましょうねえ、人を送るのもいいが、私はあとがいやです。』

と給仕しながら言つた。

「あゝ、食つた。食つた。』

まもなくその声が子どもの間に起つた。三郎は口をふいて、そこにあるたんすを背に足を投げ出した。次郎は床柱の方へ寄つて自分で装置したラジオの受信機を耳に当てがつた。細いアンテナの線を通して傳わつて来る都会の声も、その音楽も当分は耳にすることができないかのように。

四

翌日はもはや新しい柱どけいが私たちの家の茶の間に掛かつていなかつた。次郎はそれを厚い紙箱に入れて、旅にさげて行かれるように荷造りした。

その時になつてみると、太郎はあの山地の方で既に田植えを始めている。次郎はこれから出かけようとしている。お徳もやがては國をさして帰ろうとしている。次郎のいないあとはにわかに家もさびしかろうけれど、日ごろせゝこましく窮屈にのみ暮らしてきた私たちの前途には、いくらかのへやのゆとりもある日も來そうになつた。私は私で、もう一度自分の書斎を二階の四疊半に移し、この次は客としての次郎をわが家に迎えようと思うなら、それもできない相談ではないようみえてきた。どうせ今のすまいは、あの愛宕下の宿屋からの延長である。残るふたりの子どもに不自由さえなくば、そう思つてみた。五十円や六十円の家賃で、そう思わしい借家のないこともわかつた。次郎の出発を機会に、ようやく私も今のすまいに居すわりと観念するようになつた。

私はひとりで、例の地下室のような四疊半の窓へ近くいつた。そこいらはもうすっかり青葉の世界だった。私は両方のこぶしを堅くにぎりしめ、それをうんと高く伸ばし、大きなあくびを一つした。

「大都市は墓地です。人間はそこには生活していないのです。』

これは日ごろ私の胸を行つたり來たりする、あるすぐれた藝術家のことばだ。あの子どもらのよく遊びに行つた島津山の上から、芝・麻布方面に連なり続く人家の屋根を望んだ時のかつての自分の心持をも思いあわせ、私はそういう自分自身の立つ位置さえもが、あの藝術家の言いぐさではないが、いつのまにか墓地のような氣がしてきつたことを胸に浮かべてみた。過ぐる七年のさびしいあらしは、それほど私の生活を行きづまつたものとした。私が見直そうと思つてきたのも、その墓地だ。そし

て、その墓地から起き上がる時が、どうやら自分のような者にもやつて來たかのように思われた。その時になつてみると「父は父、子は子。」でなく、「自分は自分、子どもは子ども。」でもなく、ほんとうに「私たち」への道が見えはじめた。

夕日が二階のへやに満ちてきた。階下にある四疊半や茶の間はもう薄暗い。次郎の出発にはまだがあつたが、まとめた荷物は二階から玄関の所へ運んでいた。

「さあ、これだ、これがぼくの持つて行くいちばんのおみやげだ。」

と次郎は言つて、すっかり荷ごしらえのできたとけいをあちらこちらと持ちまわつた。

「どれ、わたしにも持たせてみて。」

と末子は兄のそばへ寄つて言つた。

遠い山地も、にわかに私たちには近くなつた。この新しい柱どけいが四方木屋の炉ばたに掛かって音のする日を思いみるだけでも、樂しかつた。日ごろ私が矛盾のよう、自分の行爲を考えたことも、今はその矛盾が矛盾でないような時も來た。子のために建てたあの永住の家と、旅にも等しい自分の仮の借家ずまいの間には、にじのような橋が掛けたように思われてきた。

「次郎ちゃん、停車場まで送りましょう。末子さんも私といっしょにいらっしゃいね。」

とお徳が言い出した。

「ぼくも送つて行くよ。」

と三郎も言つた。すると次郎は首を振つて、

「だれも來ちゃいけない。今度はだれにも送つてもらわない。」

それが次郎の望みらしかつた。私は末子やお徳を思い止まらせたが、せめて三郎だけをやつて、飯田町の停車場まで見送らせることにした。

やがて、そこいらはすっかり暗くなつた。まだよいの口から、家の周囲はひつそりとしてきて、坂の下を通る人の足音も少ない。都会に住むとも思えないほどの静かさだ。氣の早い次郎は出発の時を待ちかねて、住み慣れた家の周囲をひとまわりして帰つて來たくらいだ。
（行つてまいります。）

茶の間の古いとけいが九時をうつころに、私たちはその声を聞いた。植木坂の上には次郎の荷物を積んだ車が先に動いて行つた。いつのまにか次郎も家の外のろじを踏むくつの音をさせて、静かに私たちから離れて行つた。

【學習の手引】

- (1) 全体のすじを短いことばで言つてみる。読後感を話しあう。
- (2) 登場人物の性格について話しあう。
- (3) この文で「あらし」と言つてゐるのは、何をさしているのかを考えてみる。
- (4) めい／＼の生活に取材して、このような文を作つてみる。

植木坂
東京都港
区。千代田区

七山と海

この課には國木田独歩の「山の力」と、徳富蘆花の「九十九里」の二つの文を收めてある。思いを夏の山、

夏の海にはせて、楽しく大自然を見つめよう。

一、山の力

國木田独歩、本名は哲夫。明治四年（一八七二）千葉縣銚子で生まれ、明治四十一年（一九〇八）になく

なった。詩人。小説家。作品には、「忘れえぬ人々」・「牛肉と馬鈴薯」・「武藏野」その他たくさんあり、「独歩全集」に收められてある。

尋常中学校
明治十九年
から三十一年
まで二年
に次ぐ年
限で、教育機
関五修業校

私がまだ十四ぐらいの時でした。私の学校友だちに、大友直次郎という、やはり同じ年ごろのわんぱくざかりの少年がいましたが、この子のいさんに直太郎というのがありますて、そのころ尋常中学校の生徒で、年は十六でした。

直太郎さんは私どもによくいろいろなおもしろいお話を聞いて聞かしたり、ときどく不思議なてじなをして見せてくれますので、私どもはこのにいさんがだれよりもいちばん好きな人でした。

ころは六月の末と覚えています。ある日のこと、私は大友の宅に遊びに行きますと、直太郎さんが出て来て、「きょうは、これまでにないおもしろい、不思議なてじなをやつて見せるが、もしそのたねがわかったなら、なんでもやろう、ふたりの好きな本をやる。」と言われました。

大友と私はこよどりして直太郎さんのへやに行つてみると、白い厚紙の大きな箱の一方があいているのが横に倒してあつて、ちょうど机のようになっています。直太郎さんはそのあいた方にすわつて、もつたいらしく言われることには、

「さあ／＼ごろうじろ、たゞ今この箱の上に縫針を十本ばかり置きます。指一本出さないのに、この針が箱の上を踊り出したら不思議。さあ／＼よく氣をつけてごろうじろ。」

と、箱の中から針をたくさん出して置きましたが、直太郎さんは右の手を箱の中に入れて、ごそごそと厚紙の裏をこすりますと、厚紙の上の針が、行列をして、前後左右に動きはじめました。私どもは、目を丸くして、驚いて見ていくと、今度は針が一本一本縦につながつて、長い糸のようになります、それがぐる／＼と輪のように回りはじめました。

「さあごろうじろ。縫針は縫糸と変わり、今度はまたもとの縫針に逆もどり。」と、直太郎さんは大得意で、厚紙の裏をゴツリと一つ打ちました。そうすると、つながつていた針がばら／＼になつて、

一箇所にかたまつてしましました。

「どうだね。不思議だろう。たねを見せてやろうか。」と直太郎さんが言いますので、私どもは、「なあに、見せてもらわなくつてもよろしい。」とふたりで縫針を手に取り、何か着けてはないかと検査しましたが、別にのりも飯粒も着いていないのです。そこで私は手に取った針をなにげなく箱のふちの方に置きましたら、たちまちその針が外の針のところに飛んでまいりました。これを見て大友も私もあいた口がふさがりません。

「さあどうだ。たねを見せようか。」と言いながら直太郎さんが箱の下から出して見せましたのが、握りこぶしほどの黒い石でありました。

そして、直太郎さんの言うには、「これはじしゃく石とて、鉄を吸い寄せる力を持つてゐるのだ。じしゃく石のことはお前たちも学校で教わつたろう。しかしこんな石を見たのは初めてだろう。」と、

それからその石でくざやはさみの小さいのまで吸い着けて見せてくれました。くざなど三寸も離れていて、石に飛びつきます。たまりかねて、大友は、

「にいさん、こんな石はどこにありますか。」

「そらそう聞くだろうと思った。この石は東方便山の絶頂にあるのだ。しかし容易なことでは取れはしない。針や、らしん盤や、かなづちを持って行って、拾ったり、欠いて取つたりした石を、いち／＼試験してみなければならぬ。ところが、絶頂はじしゃく力が満ちているから、針を着けてみても、ちよつと判断ができないのだ。できるだけ多く拾つて来て、それをふもとまでおりて試験してみると、運がよければじしゃく力のある石を得るし、運が悪いと二十も三十も拾つた石がまるでたゞの石のことがある。この石だつて、にいさんの学校の友だちが、この前の日曜に取りに行つて、やつと二個ほど捨い当てたのを、にいさんがむりにもらつて來たのだ。」

この話を聞いて、私どもは、いよ／＼この石がありがたくなり、どうかしてわれ／＼も一つ拾つて來たいという欲を起しました。

そこでふたりは相談をして、今度の日曜にはたゞふたり、朝から東方便山に登り、どうにかして一つ二つじしゃく石を拾い、それを学校に持つて行つて、外の生徒を驚かしてやろうと、こつそりそのまま往復五里です。縣下で一、二を争う高山でありますから、町から見ますとその頂は近いように見えても、登るとなると容易なことではないのです。ことにふもとには樹木の茂つた小山があい重なつ

てるので、直線に見たよりも、その道は非常に迂回しているのであります。

若葉の時候ですから、山遊びにはしごく適しているのです。しかし、私どもは、東方便山のような高山に登るのは、初めてですからお互に内々不安心ではありましたが、頂が目の先に見えるだけ、近いように思われて、勇氣を鼓しながら野道を急ぎました。

ふたりともふろしき包を一つずつ。これは握り飯を包み、帰りにはじしゃく石をうんと包んで肩にかつぐつもり。またおの／＼かなづちを一ちょうど、縫針の折れば母の針箱から持ち出し、らしん盤を持って行きたくとも手に入れることができないのであきらめ、草履をはき、ステッキを打ち振り、初めのうちは歌をうたいながら進みました。

天は晴っていましたが、雲のゆききは割合に急でした。こういう空模様は、はなはだ当てにならぬものですが、少年のことゆえ、空模様などには気がつきません。日が照つていさえすれば、上天氣のつもり、もし雨に会えばどうなることか、そんなことにはまるで思いも及びませんでした。

ふたりの道々の話は、

「かなづちを吸い着けるようなのを拾いたいものだなあ。」

「だけれども、もそなのがあつたら、打ち割る時にかなづちが動くまい。」

「なに、その時は大きな石を持って来て打ち割るさ。」

「大きなかつたら、なかまにしておくのだぞ。」

「三つの時はそうするさ。」

「小さいのがたくさんとれたら、級の者に分けてやろう。しかし東方便山で取ったことは黙っていた方がいいぞ。」

「いつまでも黙っていて、たゞふたりで時々取りに来るさ。一度取りに行けば、これからはぼくがひとりだつて行けらあ。ひとりだつて行けらあ。」

「ぼくだつてひとりで行ける。」

「まず、こんなことを言いながら歩きました。」

町を離れて小一里も來ると、もう山道です。雜木山の起伏している間をいなか道がうねりうねり通つていて、それを、われ／＼はとば／＼とたどるのでした。百姓家が二軒、三軒ずつ、小山のふもとや、溪流の岸や、林の間に点在して、村の少年にも幾人か出会いました。

私どもはこれらの少年に道を聞き／＼行きましたが、行けども行けどもなか／＼東方便山のふもとらしい所には出ないのです。絶頂は見えなくなるし、山に近づくにつれて、山の数が急にふえてきて、方角すらちよつとわからなくなつてきました。

けれども、村人の教えてくれるまゝに進むにしたがい、いつしか家村を離れて、ふたりのからだは数百尺の上にあり、はるかに田園を見おろすようになりました。

さてそうなると、人に会うことがだん／＼少なくなり、道はます／＼分かれてくる、ふたりは次第に心細くなつてきて、話の数は減るとともに、足も初めほどにはかつぱつに動かないようになります。

さいわいと道には迷いませんでした。というのは、最後に会つた十二、三のきこりのことばでは、

「なお三、四町行くと木立の間を抜けて草山になる、そうすればこの幅の廣い道のみをたどると、しじんに方便山の絶頂に達する。」ということで、われ／＼は勇氣が加わつて、もうすぐ頂に達するかのように喜びました。

教えの通りまもなく草山に出ました。いまさらのよう眼界が開け、見わたす限り草ぼう／＼として、まるで青じゅうたんを敷き連ねたようで、草間には、すみれやたんぽ／＼が咲きいでて、きれいでありました。そしてはるかに方便の頂は見えます。

「あれだ、あれだ。」と二人は飛び上がって喜びました。けれども、この時、方便山の横から峰々へかけて、怪しい黒雲がみなぎり、それが次第に下界に舞い下がりつゝあつたのには、あまり氣がつきませんでした。

道は上りつ下りつして、しかも次第に登つて行くのですが、さて行けども行けども頂と自分らとの距離は同じようです。ふたりは、おり／＼、路傍の石に腰かけて休みました。そのたびごとに石を拾つては縫針を着けてみましたが、吸い着くどころか、はじき返しそうな石ばかりでした。

そのうちに頂もやゝ近づいて来て今ひといきと思う時、ぽつりと大粒の雨が顔に当たり、驚いて頭を上げると、まつ黒の雲は手のとゞかと思うところにたれています。

私どもはしばらく雨の小やみになるのを待つていましたが、なか／＼勢いは強くなるばかり、やみそうにもありません。そこでふたりは思案を定め、握り飯を出して食いはじめました。こういう場合に、握り飯がのどに通つたことは、ふたりの勇氣の少なからぬことを示していると、私は思います。おとなからみれば、なんでもないことでしょうけれど十二、三の少年が、かかる場合に平氣で飯を食

うことは、いくらかの勇氣がなくてはできにくいことです。

ともかく、ふたりは握り飯を食いおわりました。そこで、すぐふもとをさして駆けおりることに決めましたものの、じしゃく石一個拾うことのできないのはいかにも残念ゆえ、穴のまわりをさがして、黒い色の、似つかわしい石を、いち／＼拾つてふろしきに包みました。ふたりともこぶしほどある石を、十個以上も拾いましたろうか。それを肩にかついで、ふもとをさして「駆け足、進め。」で逃げ出しました。進めではない、退けです。

雨をついて、ふたりの少年が、ぼう／＼たる草山を走ること、いかに氣のどくなありさまでしたろう。けれどもふたりは、「一、二。一、二。」とかけ声で駆けました。

雑木山に逃げ込んだ時はもう、しめたと思いました。ちょうど、さつき、雑木山を出た時にもうしめたと思ったと同じことです。

きこりの小屋があつたのをさいわい、そのうちにふたりは駆け込みましたが、これは雨をよけるためではなく、肩にかついでいる石からじしゃく石をえり出すつもりなのです。

びしょぬれになつていきましたが、駆けたために汗が流れ、からだは燃えるようです。ふたりはしばらく休息して、さて石をえりはじめました。

「どうだその石は。」と、ひとりが問います。

「だめだ。」と、ひとりが情なさそうに答えてその石を捨てます。

「着いた。着いた。」と、ひとりが叫びます。ところがほんとに針が着いたのではなく、たゞ着いたようと思つたのです。くやしがつてその石を林の中に投げ込みます。

「だめだ。」と、ひとりが情なさそうに答えてその石を捨てます。

私は家に帰るや、湯に入れてもらつて、夜食を終つた時には、疲れが出て、からだは綿のようでしたけれど、ひそかに自分のへやと決まつてゐる三疊敷にはいり、ランプの下で、例の一個の石を机の上にのせ、針を着けてみました。じしゃく力のあると思つたのは、未練な心の迷いでした。やはりただの石で、針はおろか、ちりも着きませんでした。

翌日、学校で大友に会い、検査の結果を聞きますと、同じことでふたりともなんの得るところもないのがわかりました。
あまり残念ですからだれにもこれと言いません。しかし、ふたりとも、近々ぜひとも絶頂に登つて、目的を達せんばやまないという決心でした。

三週間たつて、七月の中旬になりました。きょうこそ大丈夫と、ふたりは、またもや朝早くから家を飛び出しました。

もう、道を聞く必要もなく、やす／＼と絶頂に達することができた時のうれしさは、たとえようがないません。見わたす限り、空は青々と晴れ、風はそよ／＼と吹いて、汗になつたからだにこゝちよく吹きつけます。ふたりはまず舌打ちして握り飯を食い、そして、今度は用意してきたとくりの水を飲みながらも、きよろきよろと四方を見まわします。そこらの石が、こと／＼じしゃく石のようにな

も見えます。

一時間ばかり、ふたりは夢中になつて、あるいは拾い、あるいはかなづちをもつて土地の底に隠れている岩角をかきとりました。

ほとんどかつかれぬほどの石を、ふたりは肩になつて、先の日に休んだきこり小屋まで帰つて、ていねいに検査しました。

私は、まず、一番大きな石を試験してみました。しかし、それはたゞの石でした。次に長方形の石を取つて、くぎの上に置いてみましたら、二寸ばかり離れたところから飛び着いたので、私は思わず、「ばんざい。」と叫び、おどり上ると、大友も続いて、「ばんざい。」とおどり立ちましたから、「きみもか。」とその石を見ますと、私の石よりか形も倍大きく、そして、重いかなづちがぶらりと下がるほど、じしゃく力を持つていたのでありました。

それより一個一個と検査してついにふたりで小さいのを七個、大きなのを二個ほどえり分けて、今度は大得意で家に帰りました。

私は、父母や姉や妹の前で、いろ／＼のてじなをやつて見せて、第一に妹を驚かしましたが、父は笑っているばかりで、少しも驚いてくれませんでした。私が、厚紙の上に長いくぎを置いて、それをぐる／＼回しながら、「さあ／＼これがへびの巣ごもりでござあい。」と言つた時、母と姉がふき出しました。

その翌日、学校での大友と私の得意といつたらありませんでした。ふたりは、運動場からはるかに方便山の頂をのぞんで、顔を見あわせてくす／＼笑いました。方便山の恐ろしいじしゃく力は、私どもでした。

もをすら引き着けておるのでした。

二、九十九里

徳富蘆花

（「独歩全集」による）

上総
千葉縣の東
部
九十九里
千葉縣の東
部海岸

飯岡

千葉縣海上
郡

大東岬

千葉縣長生
郡

片貝村

現在の片貝
町

千葉縣山武
郡

豊海村

山武郡

栗生

豊海村の中
の一部落

まりのや
養女の名
一まりに
なぞらえた
名

約七千里の海岸線をもつ本州日本には、日本海方面にも、太平洋方面にも、ずいぶん長い砂浜はあります。上総の九十九里、美しい浜はありません。北、飯岡の岬から、南、大東岬まで、六丁一里で九十九里、実測で十六里半の砂浜は、そこにその美しい形を破るべきの小山、一の岩しようだなく、永ごうに白波立てる襲い寄る大東洋に対して、ゆるむ時ない半月の弓をじわりと張つて受けとめています。九十九里のふところは浅い。最長径が三里にはすぎない。しかし胸は廣い。十六里半に及んでいます。右に大東、左に飯岡、この二つの岬を両腕と伸ばして、十六里半の細いく柔らかな砂はおたけびしておどりかかる大東洋を慈母のようなその胸にやんわりとかきいだいでいるのであります。この大きな胸のいわばみずおちが片貝村です。片貝から南に隣して豊海村があります。その字の一つなる栗生の里に、私どもは七月いっぱいを過ごしました。

栗生の浜の波うちぎわから二丁上ると、十二、三年生のまつ林の中を一條の小みちが西へ通うています。その小みちに沿うて東西に長細い短ざくがたの屋敷が、私のかりそめに名づけた「まりのや」の敷地です。浜から來ると、はねつるべが目じるしてありました。

ながらめ貝
巻き貝の一種。

廣さ一丁余、長さ十六里半このおびただしい砂浜は、人の子の生活の戦場で、同時にその遊び場であります。風雨の中の舟引き揚げ、いっときを争う漁舟の乗り出し、地引きの網の上がりぎわ、男は裸、女は真顔で、えい／＼声を出す時は、自然を相手の戦争という感が、ひし／＼と人を圧します。しかし、しけが過ぎて二、三日、右に大東、左に飯岡の岬もあり／＼と見えて、空青々と日うらゝかに、こゝちよいほどの南風がそよ吹いて、万里一碧の海のえがおに愛敬ばかりの白波を立てる日は、向こうの方でながらめ貝をかく男も、裸で子どものふろおけほどもある飯びつ引き寄せ、立ちながら茶づけを食うている赤銅作りの仁王様も、一張らの晴れ着を汗にすまいとて、それをふろ敷に包んで負って、赤いじゅばん一つになつて波うちぎわを行くいなか娘も、街道の砂ぶくに引き換えてしつとりと彈力ある波うちぎわの砂路を、荷馬車引かして行くむこうはちまきの男も、自轉車の小僧も、砂の上にすわつて日がな一日のんきに網を繕うているじいさんも、その子のためにおもちゃの小がにを取りとて懸命に両手で穴を掘つてゐるあかみさんも、人形のような両手をあげて、あひるのみずかきのような両足でよち／＼走つて來る三歳の女兒も、それらを見ている私どもも、鬼がないさいの河原の砂遊びをしている一樣の子どもとしか思われません。まことに人生は嚴肅であります。そしてまた快活であります。

この砂浜はまだ大きなカンバスであります。いろ／＼のものがいろ／＼のものを描きます。風が拂い、雨が流し、波が洗うに任せてあるこのカンバスの上に、もちろんいわゆる不朽とか無窮とかは許されません。しかし、せつななものにも人間の不朽よりめでたいものはあります。第一にめでたい波

の手の跡をごらんなさい。波は生きています。生きた波の手の跡に、波の氣分が現われていないので、たゞの一筆だつてありません。彼は好んで砂をしづらに織ります。まつ皮模様を描きます。わに皮を作ります。朽ち木型。かんなをかけた玉目型。すこぶる意氣なあややしまも彼の手です。人の足跡。子どもの足跡。わだちの跡。馬の足跡。大きな梅花模様は、犬が行く／＼描いたのです。不具ながえでの三本足、鳥にしては大またなのは、からずには違ひない、ひょい、ひょい、ひょいとやゝしばらく続いて、何かに驚いてぱつと飛び立つたげであります。小さな小さな模様の小刻みに右に続いて、左に折れ、また翻つてもとへもどつてゐるのはちどりかなにかの心の曲折を語つています。かにの足跡があります。貝の歩いた跡があります。ある時、小さな小さなはけでぱつぱとかいたような細い細い半月がたを、「これはなんだろう、いつたい何がかいたのだろう。」とよく見ていると、りゅうのひげに似た小さな草がそ知らぬ顔して、「私じゃありません。」と細い首を振つていました。

九十九里に行つた最初は、七月といつても風雨がちで、この大きな海を前に控えながら、毎日、とうふや、粕谷から持参のキャベツ・えんどう、伊香保のほしわらびの類ばかり食うてゐる日が続きました。そのうち二週間もたつと、七月も半ばになつて、あじの地引網が始まりました。私どもが帰るころは、あじも大きく、味もだいぶよくなつていきました。朝暗いうちから拍子木が鳴ります。地引きの始まる知らせです。午後から鳴るのは、ふろ屋のふろがわいた知らせでした。朝の拍子木は、栗生にも片貝からも鳴りました。私がゆかた一枚で海浴に行くころは、たいていもうひきはじめていました。海浴と朝の運動からいったんまりのやに帰つて、がま口と魚を入れる麻袋を持って、夫婦が女中をひとり連れて出かけるころには、早いのは上がつていました。こちらが早い時は、砂にすわつて

待っています。きわめて「なぎ」の朝などは、地引網の組が幾組も幾組も南に北に並んでいます。霧の中に小さく見える組、もう目にはいらぬほどはるかな組もあります。なるほど九十九里は大きな浜です。

さじ網
地引網

腰とくびすに力を入れて、急がず休まず永劫に続くかのようにじわく引くのも、見ていて力のはいるのですが、網の目標の浮きだるが見えてきてからの活氣はまたみものあります。小一丁も離れて引いていた南北二列の引き子が、おい／＼近寄つて來たかと思うと、一方の列が網をかえながら、えつさえつさと他の一列の方へはせ寄ります。はちまきの裸男がざんぶと海に飛び込んで、網元へまわります。ぼてふりが寄つて来て、やつさかごがいくつもいくつも並べられます。波うちぎわでは、そつち引け、こつちしほれと網主がのゝしりわめいています。私どもも砂の上から立ち上がって、そろ／＼波うちぎわへ向かいます。もはや網は盡きて、なわ網が見えてきました。ばあさん、かみさん、娘までが、ざぶ／＼海に飛び込んでいって、くだんのなわ網をつかんで、一抑一揚、歌で拍子をとりながら引つ張ります。名物の地引歌がこれです。中でも年配の女がかなきり声で音頭をとります。みんなが続いてはやします。

かなきり声が音頭をとると、かなきり声でみんながはやす。かれ一句、これ一句、うたつては引き、引いてはうたう。抑えて揚げて、かどんで、伸びて、右の片足ひょいと上げて、拍子も調子もあもしろく、網はだん／＼上がつて来る。



もはや網が見えてきました。網の縫ぎめを、全速で解く。海にくじつて、網のふくろをしほる。裸の網主がのども裂けよとわめく。いっさいの男女はぐるりと網に取りつき、「なんとかなんする、なんとかなんせい、なんとかなんとかやあい。」をやはりうたい続けながら、網をたぐつてははね、しほつてははね、だん／＼ふくろの底へさかなをしほつてゆきます。子どもがたまを持つてたかります。ものはや、網の中は、さつきからあじやさばの青光り白光りがばた／＼ばた／＼ごつた返しています。あじの千五、六百ははいるやつさかごが持つて來られて、いっぽいになると、乳をだらりと下げたむこはうちまきもろはだぬぎの女たちがふたりでかごの縁をつかんで、「やつさ、やつさ」で浜へ持つて行きます。どうと置いておくこともあり、ひっくり返すこともあります。いやもう盛んなことです。

(「新春」による)

【學習の手引】

- (1) どうして山へ出かけることになつたかを考えてみる。
- (2) 「山の力」というのは、何をさしているかを考えて、話しあう。
- (3) 九十九里の地図を調べて書いてみる。
- (4) 地引網に關係のことばをひろつて書いてみる。
- (5) 山の生活と海の生活とを比べてみる。そして話しあう。
- (6) 山や海に取材して文を作る。
- (7) 作者についてもつと調べる。

八 ことば

この課は、「ことば」について書かれた二つの文から成り立っている。この文をよく読んで、國語についていろいろ考えてみよう。

一、書けている

石森延男

石森延男（はしのり のぶお）は、明治三十年（一八九七）北海道札幌（さっぽろ）で生まれた。文学者。童話や小説に筆をとっている。著書には、「咲き出す少年群」・「うさぎさん」・「火山島」などたくさんある。

私がまだ一心に絵を勉強しているころであった。何日もかゝって仕上げた絵を先生のところに持つていって見てもらうと、しばらくその絵をながめていたが、

「きみ、やはり空氣が出ていないね。」

と言われた。

私には、この「空氣」ということばの意味がなか／＼のみ込めなかつた。

「先生、空氣って、なんですか。」

ある日、思いきつてこんな愚問を発したものである。先生は、ちょっと不思議な顔をしながら、私

の方を見て、

「空氣って空氣さ。」

と言われて、あとは何も答えられなかつた。

絵を勉強するほどのものが、「空氣」などというごくありふれたことを知らないはどうするのだと
いう「なぞ」かもしれないなかつた。「空氣」もわからないような者は、さっさと絵はやめて、かじやでも
やつた方がいいということであつたかも知れない。

私は、それからは、わからないながら、この「空氣」を出すために苦心を重ねていった。

「こんどは、少し空氣が見えている。」

こう言われた時の喜びは、今でも忘ることができない。そう言われたその時の絵もあり／＼と目に思ひ浮かべることができる。それは札幌の植物園の一ぐうを写生した大きな水絵であった。ワットマン二つ切れほどもので、水張りをした大きな厚い画板を持ち運びするだけでもほんとうに重かつた。

近景には、ライラックが咲いていた。そのそばを細い道が通つていて、背景は、にれの木でお／＼われていた。枝の間からわずかに晴れた空がこぼれて光つていた。わびしいほど静かな情景であったが、單純な構図の中に初夏の明かるさが満ちてあり、どこかでかっこうが鳴いていたり、りんごの花の甘いにおいがしてきたりしそうななつかしさのこもつた絵であつた。

「空氣」というのは、物と物との距離が現われていることである。遠近の調子が出ていることである。つまり立体感が画面にあふれていることであるが、のみ込めたのは、それからまもないことであつた。

わかつてしまえば、なんでもないことである。遠近法などという理屈ではなく、色彩の上からでもわけなくこれは表示されることであった。線の上からも、また筆勢の上からも、ゆがめ方からも、「空氣」なるものは、かもし出されることがわかつてきた。

先生は、それからは、黙って、うなずいてくれるばかりであつた。

私は、初めから先生が、手をとり足をとりして、「空氣」なるものを教えてくれなかつたことを、かえつてありがたく思つた。最初から、形の上で、「こんなものが空氣だ。」と言つて示してくれなかつたことがかえつてのちのためになつたと思つた。

それと同じようなことを、文章を書くようになつてからも経験した。

一つの文章を書き上げてしまつて、これでじゅうぶんだと思うほど手を加えたものを、先生に見ていたゞいた。

先生は、

「まだ書いていないね。」

と簡単に言つて、私に作品をもどされた。「まだ書いていないね。」これには弱つた。この通り文字を使って、一生懸命に書いてあるではないか。書けていないとは、どんなことをいうのであろうか。

どうすれば書けたことになるのであろうか。

私は、若いころ思い知つた「空氣」の体験をしみくと心の中で反芻ナガしてみた。

今こゝで、「書けていない。」ということはいったいどんなことですか、と問い合わせ返すような愚をやめて、ひとつ「書けている。」と言われるまで努力しようと決心した。

何編かの作品を書き続いているうちに、このことも、よくわかつてきた。「書けている。」といふことは、ことばがみな生かされているということに外ならなかつた。不自然な場面ではなく、当然そうなくてはならないような場面のことであつた。どうしてもこのようなことばをとりかわさなければならぬようなことがらであつた。

たゞの説明ではなく、むりな誇張でもなく、決まりきつた順序でもなかつた。たとえ小さな動作でも、景色でも、表情でも、それが真実読む人の心にそのままに受け入れられるような秩序であつた。

私は、今こゝで自分の二つの思い出を取り出した。一つは絵のこと、一つは文のことであるが、いずれも藝能の世界といえども、藝能の修業にあたつて求める態度というものと、他の道——學術研究の場合でも信仰上の問題でも——に向かつて進んで行こうとする場合と、さほどの違ひはないと考える。

たとえどんなことでも、ほんとうにそのことを身につけようとすれば、他人からの示唆を受けることは、能率的で進歩的な近道であることはいうまでもない。しかし、たゞ他人からの導きにたよつてのみいては、決して身につく上達の道とはならない。

やはり、自分自身で、いろいろとくふうしたり、苦心をしたり、時には、悩んだり、つまずいたり、失望したり、落胆をしてみたりしてみなければならない。この努力を続けることによつて、次第に暗さが消えて、少しずつ、実に少しずつではあるが、光明がさし込んでくるものである。この光明の美しさ、喜び、不思議な色合いは、努力した者のみの味わえる恵みであろう。

(「新しい教科指導」による)

二、はつきりしたことば

中平解

中平解は、明治三十七年（一九〇四）愛媛県で生まれた。文学博士。著書には「フランス語学新考」・「フランス語学探索」・「ことば」などがある。

ことばは、われ／＼の氣持や考え方を相手に傳えるためのものである。したがつて、われ／＼がものを言つたり書いたりする時、口から出ることばや、文字に書かれることばは、はつきりと自分の氣持なり考え方なりを相手に傳えるものでなければならぬ。もしわれ／＼の使うことばが、はつきりしないであいまいなところがあれば、相手の人、すなわち、われ／＼の話を聞いたり、われ／＼の文章を読んだりする人は、われ／＼の氣持なり考え方なりを、われ／＼が言おうとする通りにつかむことができなくなることになる。それでは、ことばはじゅうぶんの働きをしたといえぬ。せっかくことばという便利なものがありながら、使い方が正しくないために、その便利さが弱められることは、考えてみれば惜しいことである。

このように、ことばはわかりやすく話されたり書かれたりして、初めてことばとしてのねうちができるわけであるが、それは理想的にことばが用いられた時に初めてみられる事であつて、實際にはなか／＼理想通りにゆかないのが普通である。

ことばがあいまいでなく、はつきりしているためには、ことばを使う人の頭がはつきりしていなければならぬ。自分の言おうとしていることを、はつきりつかんでいるということが、その人の口やペンからほとばしり出ることばをはつきりとして、あいまいさのないものにするのである。ちょっと

考えると、自分の言おうとしていることをはつきりつかむということは、だれにでもできることのようであるが、それがなか／＼できにくい。

人間の感情というものは、きわめて複雑なものであるから、その細かい氣持をすみからすみまで細かにとらえて、これを細かに言い表わすということは、すこぶるむずかしいことである。極端にいうと、どのようなことばを使つても、複雑なニュアンスをもつた氣持をそつくりそのまま、相手に伝えよるということは、不可能なことかもしれない。ある場合には、かえってことばに表わさないことによつて、いつそはつきり相手の胸に自分の氣持を傳えることができることもある。これは、われ／＼がいろいろ／＼な場合に、身をもつて経験する事実である。

われ／＼が、はつきりつかむことのできないのは、感情だけではない。頭の中に浮かんでいる考え方をつかむ場合でも、その考えがはつきりとまとまらないために、これを正確につかむことのできないことがよくあることも、われ／＼が平素よく経験するところである。われ／＼の頭の中にあるものは、たとえ論理的に動いているものであつても、数学のように、正確になんのあいまいさもなく組み立てられているものではない。学者の非常にちみつな考え方の場合は、数学的正確さに近いといえるであろうが、それでも数学のようにはいかない。

このように、不確かなものを言い表わすのであるから、われ／＼のことばが、どこかにあいまいさを持つということは、厳密に考えれば、やむをえないことかもしれない。しかし、その不確かさを不確かさまゝにつかんで、そのまゝ言い表わすことができれば、そのことばは、はつきりしているといふことができよう。だが、不確かなものを、ありのまゝに、言い表わすことのできる人は、はなはだ

少ないのでないかと思う。ことばにこうしためいせきさを要求することは、あるいはむりなことかもしれない。

これほどきびしく考えなくても、自分の感情なり考え方なりを、はつきり言い表わすことは、なかなかむずかしい。しかし、へいせいからはつきり言い表わすように努力しておれば、それが、いつのまにか習慣となつて、どんな場合でも、はつきりしたことばを使うようになるのではないかと思われる。

自分なども、あまりはつきりしたことばを使うことのできない人間であるが、これは、一つには、自分の頭がよくないためであるとともに、いま一つには、なんとなくはにかむ癖があつていろいろな場合に、自分の頭の中にあるものを、そつくりそのまま外へ出すことをためらう氣持になることがあるためである。これはよくない癖であると自覺しているのであるが、なか／＼直らない。したがつて、めいせきな頭を反映しているめいせきな文章に会うと、何か救われたような氣がする。子規の書いたものとか、漱石の文章などに触ると、何か自分の病が快癒したような喜びを感じる。鷗外の作品を読んでゆくうちに感ずる喜びも、確かなものに触れたところからくる喜びであろう。はつきりとした話し方をする人に接した時に感ずるあの明かるい楽しさも、同じ理由に基づくものであろう。話のうまい人、ことばを口から出しながら、それによつて考えをまとめていっているような感じがあるが、自分などは、むしろことばがなんとなくじやまになつて、考えがまとまらぬといったようなところがある。

今から十二、三年も前のことであるが、漱石の「ガラス戸の中」を読んだ時、急に自分の頭がめいせきになつたような錯覚にあそわれたことがある。これは、漱石の文章がめいせきであるからである。こ

のような氣持を起させる文章というものは、そうあるものではない。自分が今こゝに書いている文章は、その逆であつて、読者は、急に自分の頭が悪くなつたような錯覚を起すのではないかと思う。

われ／＼の理想とするところは、わが國の文化を世界的水準にまで高め、更にある領域では、世界の水準をねきんで、これによつて人類の平和と進歩に貢献することであるが、そのためには、われわれは、まずめいせきに考え方、めいせきに表現することを学ばねばならない。さいわい、このたび漢字が制限され、かなづかいがある程度合理化され、日本語が平易であるとともに、美しいものとなる基礎が與えられたから、この好機をとらえて、日本語をめいせきな表現に耐えるものとなるように練り直し、その結果でき上がつた新しい日本語を自由に駆使して、われ／＼の文化が世界に光を放つようにしなければならぬ。

めいせきな頭脳からめいせきなことばが流れ出るとともに、めいせきなことばは、めいせきな頭脳を生むことを思う時、われ／＼は、われ／＼の國語をめいせきなことばにしたい望みを、はげしく感ずる。日本語を、はつきりした表現に耐える美しいことばにするには、國民全体の協力を必要とする。少数の識者がどれほど努力してみても、國民のひとりひとりが、このことの重要性をはつきりつかんで協力しない限り、われ／＼の口やペンから流出ることばは、めいせきで美しい響を持つたものとはならないであろう。

どのような瞬間にも、あいまいな、濁つたことばを使わないよう、國民のひとりひとりが心がけるようになれば、日本語が、正しく、美しい、そして澄んだことばになることは疑いない。しかし、このことは言うべくしてなか／＼行いがたいことである。やはり知識階級といわれる人々が、まずこれ

を実行し、やがてその運動が、波紋のひろがるよう四方にひろがつて、社会のすみへにまでこの精神が徹底するということになるのではあるまいか。

この意味からして、学校とか、新聞・雑誌とか、ラジオなどのもの使命は、非常に大きいといふとがいえる。これらのものに、この自覚があるとないとでは、結果において、非常に大きな差異ができてくる。したがつて、学校の先生とか、新聞記者とか、雑誌の執筆者とか、ラジオの放送者などの使命は、はなはだ重いといわねばならぬ。同じく種々の書物の著者たちも、自分の書く文章が、読者のひとりひとりに目に見えぬ大きい影響を與えることを考えて、一字一句もあろそかにせぬように心がけてもらいたい。

これらの人々が、すべてこうした慎重な態度に出て、毎日目に見えぬが、しかし深く大きい影響を一般大衆の上に與えてゆけば、十年、二十年と時間がたつてゆくうちに、われくの日本語も、見違えるほど美しい、めいせきなことばとなつてゆくであろう。

日本語を離れて日本國はなく、日本語の正しい発達なしに、世界に誇るにたる日本文化の進歩発展はないから、われくは、どこまでもこのことばを愛し、このことばをもりたててゆかなければならぬ。

正しく、美しい日本語の根の上に、すべく伸びてゆくすぐれた日本の文化は、世界の文化に大きい貢献をするようになるであろうし、またぜひとも大きい貢献をするようにしてゆかなければならぬ。なんとなれば、世界の文化に大きい貢献をするような文化を作り出すことができないとすれば、われくの國は、地球上に存在する意味を持たないからである。

(「國語の教育」による)

〔學習の手引〕

- (1) 「書けている。」の文を読んで、絵の話と、文章の話との間に、どんな関係があるかを話しあつてみる。
- (2) 「空氣が見えている。」ということばと、「書けている。」ということばの意味を考えて、みんなで話しあう。
- (3) どのような場合に、ことばが理想的に用いられたといえるかを考えて、話しあう。
- (4) どうしたらはつきりしたことばを使うようになれるかということを考えて、話しあう。
- (5) この文から読み取った点を生かして、夏に取材して、たとえば「夏の生活」・「夏休みの計画をうちあわせる手紙」などという題で、文を作つて、発表しあう。

Approved by Ministry of Education
(Date Oct. 22, 1948)

教育文化研究会

昭和二十三年八月二十一日 発行
会長 国立国会図書館館長 金森徳次郎

昭和二十四年十二月二十一日 再版印刷
主幹 東京教育大学教授

昭和二十四年十二月二十五日 再版発行

國語科編集委員

長谷川 敏 正平 長谷川敏正平

石山脩

東京教育大学附属中学校教諭

渡辺 飛田 長谷川敏正平

茂

東京都立第一女子高等学校教授

渡辺 飛田 長谷川敏正平

成蹊大学教授

渡辺 飛田 長谷川敏正平

東京都立第十高等学校教諭

渡辺 飛田 長谷川敏正平

東京教育大学附属高等学校教諭

渡辺 飛田 長谷川敏正平

お茶の水女子大学附属高等学校教諭

渡辺 飛田 長谷川敏正平

東京都立目黒区立第八中学校教諭

渡辺 飛田 長谷川敏正平

同

渡辺 飛田 長谷川敏正平

東京都新宿区市谷砂土原町一三番地

稻村 宮崎 和田邦五郎 長谷川敏正平

教育文化研究会

稻村 宮崎 和田邦五郎 長谷川敏正平

教育圖書株式会社

稻村 宮崎 和田邦五郎 長谷川敏正平

大村 健三郎

稻村 宮崎 和田邦五郎 長谷川敏正平

テ 浜

稻村 宮崎 和田邦五郎 長谷川敏正平

お茶の水女子大学附属高等学校教諭

稻村 宮崎 和田邦五郎 長谷川敏正平

東京都立目黒区立第八中学校教諭

稻村 宮崎 和田邦五郎 長谷川敏正平

同

稻村 宮崎 和田邦五郎 長谷川敏正平

東京都新宿区市谷加賀町一ノ三番地

稻村 宮崎 和田邦五郎 長谷川敏正平

大日本印刷株式会社

稻村 宮崎 和田邦五郎 長谷川敏正平

佐久間長吉郎

稻村 宮崎 和田邦五郎 長谷川敏正平

東京都新宿区市谷砂土原町一三番地

稻村 宮崎 和田邦五郎 長谷川敏正平

教育圖書株式会社

稻村 宮崎 和田邦五郎 長谷川敏正平

大日本印刷株式会社

稻村 宮崎 和田邦五郎 長谷川敏正平

佐久間長吉郎

稻村 宮崎 和田邦五郎 長谷川敏正平

東京都新宿区市谷砂土原町一三番地

稻村 宮崎 和田邦五郎 長谷川敏正平

教育圖書株式会社

稻村 宮崎 和田邦五郎 長谷川敏正平

佐久間長吉郎

稻村 宮崎 和田邦五郎 長谷川敏正平

東京都新宿区市谷砂土原町一三番地

稻村 宮崎 和田邦五郎 長谷川敏正平

教育圖書株式会社

稻村 宮崎 和田邦五郎 長谷川敏正平

佐久間長吉郎

稻村 宮崎 和田邦五郎 長谷川敏正平

東京都新宿区市谷砂土原町一三番地

稻村 宮崎 和田邦五郎 長谷川敏正平

教育圖書株式会社

稻村 宮崎 和田邦五郎 長谷川敏正平

佐久間長吉郎

稻村 宮崎 和田邦五郎 長谷川敏正平

東京都新宿区市谷砂土原町一三番地

稻村 宮崎 和田邦五郎 長谷川敏正平

教育圖書株式会社

稻村 宮崎 和田邦五郎 長谷川敏正平

佐久間長吉郎

稻村 宮崎 和田邦五郎 長谷川敏正平

東京都新宿区市谷砂土原町一三番地

稻村 宮崎 和田邦五郎 長谷川敏正平

教育圖書株式会社

稻村 宮崎 和田邦五郎 長谷川敏正平

佐久間長吉郎

稻村 宮崎 和田邦五郎 長谷川敏正平

東京都新宿区市谷砂土原町一三番地

稻村 宮崎 和田邦五郎 長谷川敏正平

教育圖書株式会社

稻村 宮崎 和田邦五郎 長谷川敏正平

佐久間長吉郎

稻村 宮崎 和田邦五郎 長谷川敏正平

〔國語〕 中學一年(一)

定價金十三円六十銭

昭和二十三年八月二十一日 発行
昭和二十四年十二月二十一日 再版印刷
昭和二十四年十二月二十五日 再版発行

広島大学図書

010130449852

